

経営者の皆様に、次への視野(スコープ)を。
毎月、かんぽ生命がお届けします。

かんぽスコープ

Vol.91

経営
時流

サイバー攻撃に備えよ。 未知の脅威から企業を守る ネットリスク対策



セキュリティの啓蒙活動にも力を入れる那須氏。

「中小企業こそ、サイバー攻撃の格好の標的になっていっていると危機感をもってください」。那須氏は警鐘を鳴らす。

近年問題となっているのが、大手企業の情報を盗むために取引先の中小企業が狙われるケースだ。遠隔操作ウイルスによりPCを乗っ取られて機密情報が盗まれる場合もあれば、大手企業のシステムに不正アクセスを行うための踏み台として利用されることもある。

「いわゆる標的型攻撃といわれるもの。ターゲットは大手企業ですが、セキュリティが堅固なために攻撃をするのが難しい。そこで、情報を集めるためにまず周辺の中企業が狙われるのです」

また、フィッシング^{※1}による金銭詐取や、ランサムウェア(身代金ウイルス)^{※2}による被害も拡大している。後者の場合、身代金を支払っても解除キーが入手できるとは限らず、暗号化されたデータを回復できないことも多い。

※1 電子メールを送りつけて偽サイトに誘導し、重要情報を抜き取って金銭などを詐取する方法。

セキュリティの甘い 中小企業が狙われる。

「どのケースも被害にあった原因の多くは『小さな企業は狙われない』とセキュリティの甘さを放置したため。信用失墜による取引停止、金銭的損害、情報漏洩、データ破損による業務の停止など、その代償は計り知れません。喫緊の経営課題と捉えて、一刻も早い対策を行ってください」

「そうではありません。管理や運用を見直すだけでも、セキュリティの精度は向上しますよ」と、那須氏は中小企業に即した方法を伝授してくれた。「まずは、自分たちが守るべき情報資産を明確にすることから始めましょう」。

取引先の預かり情報やネットバンクの口座情報、業務遂行に必要なデータなど、喪失したらダメージの大きいものを洗い出す。そして、重要な情報がどのような状態にあるのかを確認し、どう守ればよいのかを考えてセキュリティ・ルールを構築するのだ。たとえば、機密度の高い情報はアクセスできる人間を制限し、管理責任者を据える。ネットバンクの利用などクリ

ティカルな業務を行うPCは専用端末化する。

「ルールづくりにはなるべく多くの社員を参加させましょう。社内情報の重要性に対する共通認識が形成され、危機意識を生み出すことにもつながります」

忘れてならないのが、ソフトウェアの最新化。OSやブラウザ、ウイルス対策ソフトなどのアップデートを徹底させ、敵の侵入経路となりうる脆弱性を放置しないようにする。万一を見越して、データのバックアップを取ることも必要だ。ネットワーク上のサーバ、外付けのハードディスクなど、データの重要度によって複数の手段を用意するとい

だろう。ウイルスの中にはLANにつながる端末すべてに感染するものもある。超重要な情報は社内ネットワークから物理的に切り離す

「中小企業こそ、サイバー攻撃の格好の標的になっていっていると危機感をもってください」。那須氏は警鐘を鳴らす。

「いわれる標的型攻撃といわれるもの。ターゲットは大手企業ですが、セキュリティが堅固なために攻撃をするのが難しい。そこで、情報を集めるためにまず周辺の中企業が狙われるのです」

「そうではありません。管理や運用を見直すだけでも、セキュリティの精度は向上しますよ」と、那須氏は中小企業に即した方法を伝授してくれた。「まずは、自分たちが守るべき情報資産を明確にすることから始めましょう」。

取引先の預かり情報やネットバンクの口座情報、業務遂行に必要なデータなど、喪失したらダメージの大きいものを洗い出す。そして、重要な情報がどのような状態にあるのかを確認し、どう守ればよいのかを考えてセキュリティ・ルールを構築するのだ。たとえば、機密度の高い情報はアクセスできる人間を制限し、管理責任者を据える。ネットバンクの利用などクリ

ティカルな業務を行うPCは専用端末化する。

「ルールづくりにはなるべく多くの社員を参加させましょう。社内情報の重要性に対する共通認識が形成され、危機意識を生み出すことにもつながります」

忘れてならないのが、ソフトウェアの最新化。OSやブラウザ、ウイルス対策ソフトなどのアップデートを徹底させ、敵の侵入経路となりうる脆弱性を放置しないようにする。万一を見越して、データのバックアップを取ることも必要だ。ネットワーク上のサーバ、外付けのハードディスクなど、データの重要度によって複数の手段を用意するとい

だろう。ウイルスの中にはLANにつながる端末すべてに感染するものもある。超重要な情報は社内ネットワークから物理的に切り離す

「中小企業こそ、サイバー攻撃の格好の標的になっていっていると危機感をもってください」。那須氏は警鐘を鳴らす。

「いわれる標的型攻撃といわれるもの。ターゲットは大手企業ですが、セキュリティが堅固なために攻撃をするのが難しい。そこで、情報を集めるためにまず周辺の中企業が狙われるのです」

「そうではありません。管理や運用を見直すだけでも、セキュリティの精度は向上しますよ」と、那須氏は中小企業に即した方法を伝授してくれた。「まずは、自分たちが守るべき情報資産を明確にすることから始めましょう」。

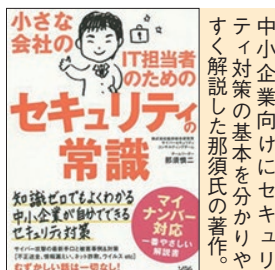
取引先の預かり情報やネットバンクの口座情報、業務遂行に必要なデータなど、喪失したらダメージの大きいものを洗い出す。そして、重要な情報がどのような状態にあるのかを確認し、どう守ればよいのかを考えてセキュリティ・ルールを構築するのだ。たとえば、機密度の高い情報はアクセスできる人間を制限し、管理責任者を据える。ネットバンクの利用などクリ

ティカルな業務を行うPCは専用端末化する。

「ルールづくりにはなるべく多くの社員を参加させましょう。社内情報の重要性に対する共通認識が形成され、危機意識を生み出すことにもつながります」

忘れてならないのが、ソフトウェアの最新化。OSやブラウザ、ウイルス対策ソフトなどのアップデートを徹底させ、敵の侵入経路となりうる脆弱性を放置しないようにする。万一を見越して、データのバックアップを取ることも必要だ。ネットワーク上のサーバ、外付けのハードディスクなど、データの重要度によって複数の手段を用意するとい

だろう。ウイルスの中にはLANにつながる端末すべてに感染するものもある。超重要な情報は社内ネットワークから物理的に切り離す



中小企業向けにセキュリティ対策の基本を分かりやすく解説した那須氏の著作。

明日からすぐに役立つ！
分かりやすく、経営に役立つ情報を配信！

まずはメルマガ登録

サイバーセキュリティ事例

無料ダウンロード

船井総合研究所が運営する「中小企業情報セキュリティ対策」の無料ダウンロードも可能。

株式会社船井総合研究所 サイバーセキュリティチーム
〒541-0041 大阪府大阪市中央区北浜4-4-10
☎0120-958-270 <https://www.securitytaisaku.com/>

※1 電子メールを送りつけて偽サイトに誘導し、重要情報を抜き取って金銭などを詐取する方法。 ※2 PCのデータを暗号化し、解除キーと引き換えに身代金を要求するウイルス。

か、場合によってはクラウド上に退避させることも考えたい。

「小規模な会社では経営者に率先して動いてもらいたいですが、この手の分野が苦手ならば、ある程度知識をもつ若手社員に任せてもいい。大事なことは、経営者がリスクを認識し、それを解消するための施策や投資を重要と考えることです」

社員教育を徹底し、ネットの危険性を周知。

そして、仕組みを運用するうえで重要なのは社員の教育。業務外のサイト閲覧の禁止、パスワードの管理など基本を徹底させるほか、定期的な社内勉強会や研修を行うなどして、インターネットを使う危険性を認識させることが必要だ。

「特にウイルスの主要感染ルートであるメールの添付ファイルへの注意は徹底させましょう。関係先から送られてきたものでも、確信がもてなかつたら電話で相手に確認をとるくらいの慎重さが必要です」

さらに自社のセキュリティレベルを上げたいと考えるなら、社内ネットワークとインターネットの出入口を制御するUTM^{※3}の導入も検討したい。外部からの攻撃を防ぐ機能に加え、もし攻撃されたとしても情報の流出を検知し未然に防止する機能がある。「最近では中小企業でも運用しやすい価格帯のものが現れている」^{※3}のことだ。

※3 Unified Threat Management (統合脅威管理)の略で、ファイアウォール、アンチウイルスなど複数のセキュリティ機能が統合された機器。

サイバー攻撃、そしてネットトラブル。身近に迫る脅威に対応するための資金を備えましょう。

ウイルス感染による業務停止、金銭損害、情報漏洩。ネットの炎上騒動が引き起こす深刻な風評被害。ネットリスクに備えるための資金準備について、事前・事後の両面にわたって検討します。



ぜひご覧ください

マンガで楽しく、分かりやすくご案内しています。

かんぽビジネスライブラリ
「ネットリスク対策に活用」の巻



資料をご要望の皆さまへ

ご覧の資料をお届けします。
ご要望の方は、お手数ですが、かんぽ生命保険の最寄りの支店までご連絡ください。



文=阿部博幸

医療法人社団博心厚生会アベ・腫瘍内科・クリニック理事長。臨床内科専門医、労働衛生コンサルタント。著書に『がんで死なない治療の選択』ほか多数。

がん治療最前線

個別化医療の現在

遺伝子情報を基に最適な治療を選択

多様な進展をみせるがんの治療において、個別化医療という考えが欧米を中心に日本でも広がりつつあります。個別化医療とは、治療の効果に影響を与える遺伝子や環境要因、さらに年齢、性別、人生設計、死生観などを考慮して、ひとりひとりの患者さんに最適な治療を提供しようとするものです。

特に遺伝子情報は個別化医療の実現に大きな役割を果たしており、診断から治療、予後の予測にわたり、有効な手立てとなっています。薬剤についていえば、同じ薬を処方されても、良く効いた人、ほとんど効かなかった人、副作用が強く出た人など、効果に個人差があるのは周知のとおりです。しかし、病気と遺伝子、薬と遺伝子の関連について解明が進む現在、個々人

の遺伝子の変異具合などを調べることで、特定の薬剤がその人にとって有効かどうか分かるようになってきました。

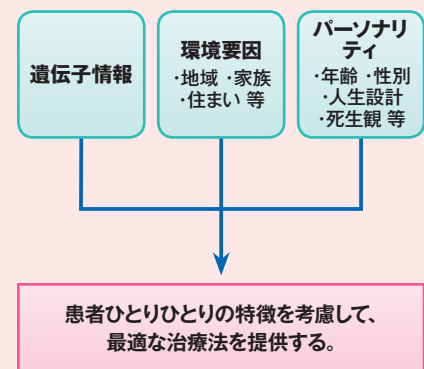
前回、前々回でお話ししました分子標的薬や免疫治療薬のキイトルーダが高い奏効率を示すのも、投与前にコンパニオン診断薬を使い、遺伝子レベルや分子レベルで薬剤の効果を判定・予測しているためです。個別化医療という考えを戦略的に取り入れた結果といえます。

予防医学の分野でも個別化医療が進展

個別化医療はがん以外の疾患分野でも進んでいます。予防医学の領域でも広がりは始めています。その人の遺伝子の変異を基に将来発症しうる病気を予測し、適切な対策を積極的に行うことで病気を予防しようというもので、発症後にかかる医療費を抑制することができます。個別

化医療の実現が進み無駄な治療がなくなれば、個人の負担は少なくなるだけでなく、国家的にみても保険医療費をおよそ半分に減らすことができるのではないかと期待されています。

個別化医療とは



(注)

記事中に記載の法令や制度等は取材当時のもので、将来変更されることがあります。詳細につきましては、各専門家にご相談いただきますようお願いいたします。

Copyright © 2017 JAPAN POST INSURANCE Co.,Ltd All Rights Reserved.

(2017.8.1)